

学生と職員がデザイン提案

空き家活用魅力発信プロジェクト

東京都

東京都は7日、西多摩・島しょ地域の空き家を移住・定住用住宅に改修する「TOKYO空き家活用魅力発信プロジェクト」の提案説明会を都庁で行った。4月から東京都内4大学（国士舘大学、東京大学、東京立大学、法政大学）と都庁内で公募した都技術職員が参加し、奥多摩町及び新島村が所有する木造平屋及び2階建住宅の空き家（3物件）について、2カ月の検討の成果をデザイン案として発表した。今後、選定したデザインを基に改修し、2026年度からの貸し出しを進める予定だ。

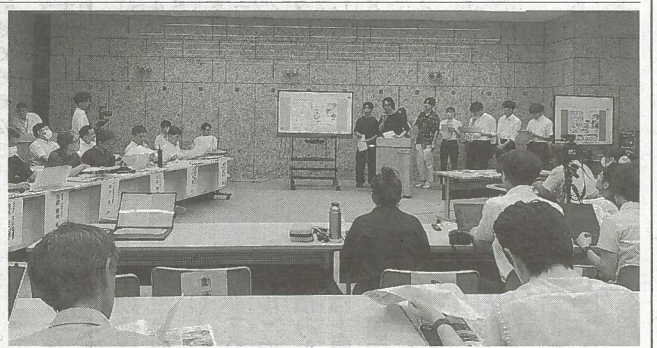
（国学院大、下吹越武人（法政大）、大月敏雄（東京大）、木下央（東京立大）の各教授と、百成道矢（新島村）、河村寿仁（奥多摩町）の各町村担当課長からコメントがあり、質疑応答を行った。

学生からのデザイン提案では、地域のひとと触れ合う空間として、玄関に土間を設けるも

(国学院大)、下吹越武人(法政大)、大月敏雄(東京大)、木下央(東京都立大)の各教授と、百成道矢(新島村)、河村寿仁(奥多摩町)の各町村担当課長からのコメントがあり、質疑応答を行った。

学生からのデザイン
提案では、地域の人と
触れ合う空間として、

ルファ」を設けるもの
が目立った。



設計にでき
ないかな
ど、各教授
から細かな
注文が付い
た。

高い評価を得ていた。

このほか都職員の提案では、リビングとサブリビングをつなぐ部分にウッドデッキや、

外壁の一部に焼き杉を使用し、玄関の前と建物周囲には多摩産材を活用した木ルーバーを設けた。岩田部長は「今回のデザイン提案では、素材については特に限定していないが、今後都が設計・施工する際には木材利用が話題になると思う」と付け加えた。

理はアルセッド建築研究所、建築・施工は来住野工務店。

多摩産材の使用材積は構造材、外壁材、造作材で約151立方メートル（立方ダースは二宮木材、東海ブレカットが供給した。構造材の約9割に多摩産材の杉・桧を使用し、輸入材では格子耐力壁の一部に米産材が用いられている。また、東京都内への移住や二拠点生活が注目されるなか、移住・定住可能な屋内広場では企業研修や各種行事などが予定されている。

構造材中心に多摩産材151m³使用

木造レシプロカル構造「フレア五日市」

東京都あきる野市



多摩産材をふんだんに使用した「フレア五日市」

平屋建て（木造）
レシプロカル構造）
・ 建築面積は約574平方
・ 延べ床面積は約380平方
・ 軒高5・85
・ 最高6・65（内装にはは

多摩産材がふんだんに使われ、木の香りやぬくもりを肌で感じることができる。心地よい空間として設計した。

総事業費は約4億円。設計・監

材以外の国産材（約17
音楽イベントで
つな木が活用
J・WAVE・
ナイアガラ盆踊り
12、13の両日に東京
都渋谷区の代々木公園
で開かれた「大滝詠一
ナイアガラ盆踊り」
の櫓を木質ユニット
「つな木」が彩った。
同イベントはFMラ
ジオ局J・WAVE主
催の「INSPIRE
TOKYO2025」
のなかで開かれた。代

るほか、約120人収（年中無休）。

櫓（上）と木材関係のブース（下）

長）が在庫していたものを利用した。また、隣地にはつな木で作ったブースも設けられ、日本製紙（東京都、瀬邊明社

タマ公園はイベント会場の一つで、ナイアガラ盆踊り以外にもさまざまな企画され、多くの人々が集まった。

ヤパン（同、額賀泰尾

木造作と木建築の源流探る

組合員向けフィールドワーク

東木協・木材研究委員会

東京木材問屋協同組合（東木協、庄司良雄理事長）木材研究委員会（飯島義雄委員長）はさきごろ、組合員を対象にしたフィールドワークとして、埼玉県ふじみ野市の内外テクノス本社工場と、さいたま市岩槻区の木力館（きりよくかん）を訪問した。木を用いた内装仕上げを行うゼネコンの専門工事業者の主加工場と、「材木屋が建てた天然木の博物館」を見学することで、参加者は木造作と木建築の源流を探った。

当日は、木材研究委員や組合役員など14人が参加。内外テクノスでは1895年に大林組の製材工場として誕生。高度な内装工事を木場センタービルリニはじめ、木造作、木質ユーアル工事を手掛けるなど、木工のエキスパート」として新時代の木材利用の要請に
 応えている。

本社工場（敷地面積



日本家屋の大槻邸見学後に記念撮影

700坪、同
530立方
（約250
坪、同190
立方¹）で構
成。フェンス
を設けない
「開かれた工
場」は、隣接
する文京学院
大学の学生か
ら「新しいス

た。通常のトラスに加えて平面的にクロスさせることでブレースの役割を担い、屋根架構は5・4^分ほどのパネル化工法の採用で、ローコスト・短工期を実現した。また、大型モックアップ（原寸の模型）を設置可能にしたスペースが設けられており、職人の手による手加工を大事にしていることが伝わってくる。

いが込められている。米寿を迎えた大槻館長は、木材・住宅資材販売を行う大忠を営む傍ら、地元市議会議員などの要職を長く務めた。見学者には水源地としての森林の役割と木材利用による資源循環の重要性を説いていく。「水はガソリンよりも高い」と聞いて、はっとさせられる場面も。

香りを体験できる小部屋があり、大槻館長は「住環境に木が使われれば」と語り、癒やされる」と話す。

木力（もくりよく）をスローガンに掲げて、その普及啓蒙活動に取り組んでいる東木協の一行にとっては、先輩からの助言にうなずいていた。参加者からは「木材に対するザネンコンの考え方が伝

の社内ベンチャー部門にNikken Wood Labが企画し、三進金属工業（大阪府泉北郡、新井宏昌社長）が開発した木質ユニット。45ミリの角製材品とクランプと呼ばれる金物を組み合わせることで、移動から組み立て、解体が手軽にできるようにになっている。

樫は駆体が鉄骨造で、屋根と上部構造の

古谷隆明社長）がさまざまな木材製品を展示・販売していた。

今回の企画は、以前から能登ヒバの楽器制作プロジェクト「アテナオト」で、JWA VEとつながりがあった古谷社長が、同イベントで木を活用したいとの要望を受けたことがきっかけでスタートした。準備期間は1カ月ほどと短かったが、

約8000坪、木材使用量720立方足)は「木工のエキスパート空間」をコンセプトに、23年3月に竣工した木造+RC造、S造+RC造の平屋建ての「タバができた」と間違われるほど、緑豊かな住環境空間に調和している。

主加工場は、クロス配置された片持ち木トラス梁による約28ス

る
木の博物館「木力館」は06年にオープン。「木をじかに触れて、見て、木の素晴らしさを全身で体感・体験してもらいたい」と

木力館は、埼玉県産の松、杉、ケヤキ、モミの木などを使い、伝統工法の通し貫き工法で建てられている。ムク材の螺旋階段など高度な手加工の技術が随た声が聞かれた。

一部につな木が使われている。屋根は、花火をイメージして木材を放射状に配置した。つな木の木材やクランプは西尾レントオール（大阪市・西尾公志社）が拡大することが期待されている。

高い幅広材がある和室の減少が進むという。一方、こだわ

加藤社長は「みなさん

1
950
950
200
200
870
290
900
600
900
50
225
900
900
900
950
775
950
630
775
950
990
870
950
950
900
17
900
900
900
900